

2020. 9. 13 第二主日礼拝

I コリント 6:12-20 「神の栄光をあらわすために」

聖書

12 「すべてのことが私には許されている」と言いますが、すべてが益になるわけではありません。「すべてのことが私には許されている」と言いますが、私はどんなことにも支配されはしません。

13 「食物は腹のためにあり、腹は食物のためにある」と言いますが、神は、そのどちらも滅ぼされます。からだは淫らな行いのためではなく、主のためにあり、主はからだのためにおられるのです。

14 神は主をよみがえらせましたが、その御力によって私たちも、よみがえらせてくださいます。

15 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。それなのに、キリストのからだの一部を取って、遊女のからだの一部とするのですか。そんなことがあってはなりません。

16 それとも、あなたがたは知らないのですか。遊女と交わる者は、彼女と一つのからだになります。「ふたりは一体となる」と言われているからです。

17 しかし、主と交わる者は、主と一つの霊になるのです。

18 淫らな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のもので。しかし、淫らなことを行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。

19 あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。

20 あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。

はじめに

コリント教会が抱えていた問題の中でも深刻だったのが、性的不道徳の問題でした。先の5章では「異邦人の間にもないほどの淫らな行い」(5:1)と

して近親相姦の罪を扱いました。パウロは6章で再び性的不道徳の問題を扱っており、今度は遊女と交わるという不品行についての問題を取り上げています。この問題の背景には信仰を持ったゆえの倒錯がありましたから、それを是正する必要もあったのです。その倒錯とは何でしょうか。それは今日の私たちにも起こり得ます。

1. 自由のはき違えとその延長

人がイエスさまを信じて救われるということは、罪の束縛から解放され自由になったことを意味します。ガラテヤ5章に次のようにあります。「キリストは、自由を得させるために私たちを解放してくださいました。」(ガラテヤ5:1)、「兄弟たち、あなたがたは自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕え合いなさい。」(ガラテヤ5:13)と、信仰者は割礼の問題に代表される旧約の律法から解放されて自由になったことを述べ、その自由を愛をもって互いに仕え合うために用いるように勧めています。

この自由とされたことをはき違えてしまったのがコリント教会の人たちでした。12節の『すべてのことが私には許されている』と言いますが、すべてが益になるわけではありません。『すべてのことが私には許されている』と言いますが、私はどんなことにも支配されはしません。」とは、信仰者は罪から解放され自由にされた者だから、何をしても大丈夫だと自由をはき違える人たちが出てきたのです。その結果、遊女と交わることも罪だとは思わなくなっていました。確かにパウロは、信仰者はキリストの十字架によって罪を赦され解放された者だから、どんなことにも支配されないとの原則に立ちながらも、しかし何をしても良いとは言っておらず「すべてが益になるわけではない」と釘を刺しています。

遊女と交わるという不品行の問題も自由のはき違えの延長にあり、それを13節で述べています。人々の言い分は、食物と腹は切っても切れない関係に

あるように、肉体と性欲は切っても切れない関係にあるのだから欲望のままに振舞ってもかまわないというのです。そのような自由奔放な生き方に対して「神は、そのどちらも滅ぼされます」（13 節）と戒め、からだは主のためにあるのだと指摘しています。冷静に考えればコリント教会の人たちの考え方はおかしいと思いますが、人間は自分の行動を正当化するために、みことばを都合よく解釈しようとするものなので、こうしたねじれた現象が起こってしまうのです。物事を自分に都合よく解釈しようとすることは、私自身の言動を振り返っても結構日常的に行われているのではないかと反省します。

2. 逸脱の原因

今日も性的不品行を是認する風潮は変わりません。なぜそのようになってしまうのでしょうか。その理由の一つとして二元論という考え方が影響しています。肉体と魂は別々なので、互いに影響し合うことはないという考え方です。遊女との交わりで考えるなら、からだは遊女に渡しても、魂まで渡しているのではないから問題ないということになります。この考え方が良しとされたら、何をしても良いことになってしまい、社会の秩序などどうでも良くなってしまいます。肉体と魂は別々ではなく一つであるように、交わりの中には人格と人格が一つになるという一致があり、その一致が美しく尊いことなのです。神さまが定めた一致の美しさは、夫婦という関係の中に与えられたものであり、それを逸脱した性的関係に対して「ノー」と言っていることを忘れてはいけません。「男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となる」（創世記 2:24）という結婚の奥義を思い起こし、交わりの中にある一致を尊ぶことができるように願います。

もう一つの理由は、私たちのからだに対する理解です。からだというと肉体をイメージしますが、私たちの存在そのものに置き換えても良いでしょう。ある人たちは自分のからは自分のものだから、どう使おうと私の勝手だと言います。そのように考える人は、私のからだ、私の人生、私のいのちというようにすべてに一人称がつき、私が主権者となって決定権を握っています。

この考え方が高じると、「私は私、あなたはあなた」というように自分と他者を区別してしまい、人が苦しんでいても自分とは関係がないという態度を取ってしまいます。昨今、自己責任ということばを良く耳にします。自分が責任を負わなければいけないことは分かりますが、何でもかんでも自己責任で片付けられてしまう風潮に恐ろしさを感じます。パウロは「あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだはキリストのからだの一部なのです。」(15 節)と、繋がりや交わりの大切を述べています。自分の責任範囲を明確にしなが、人は他者と交わり、相互関係の中で生きるように造られているのです。しかもキリストのからだの一部として、教会の交わりの中で相互に支え合っているのです。

パウロはコリント教会の逸脱した性的理解の是正を通して、人と人とが交わることのすばらしさを教えているように思います。本来神さまの前にあるべき人間関係の美しさや楽しさが、残念なことに人間の欲望と罪によって汚されてしまっています。人間関係を本来のあるべき形に回復させるために必要なことは、神さまとの関係を修復し、神さまとの交わりの中に生きること、また自分が何のために存在しているのかを知り、自分も他者も尊ぶことではないでしょうか。

3. 神の栄光をあらわす

神さまとの交わりの中に生き、自分も他者も尊ぶために、次のみことばから私たちの存在の意味に目を向けてみましょう。「しかし、主と交わる者は、主と一つの霊になるのです。」(17 節)、「あなたがたは知らないのですか。あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたはもはや自分自身のものではありません。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。」(19, 20 節)。

ここには、私たちと主イエスさまとは一つであることが述べられています。

罪は分断を生み出しますが、十字架は合一を生み出します。私たちがイエスさまの十字架を信じて救われるということは、イエスさまと一つになることを意味しています。私とイエスさまとが一つになり、あなたとイエスさまも十字架によって一つであるとき、「私とあなた」がイエスさまによって一つになります。そのように互いに一つになって繋がり輪を広げていくのが教会の交わりの美しさです。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちにおられる、神から受けた聖霊の宮であり」とは、信仰者一人一人を指すと同時に、教会を指しています。まずは主によって救われた兄弟姉妹の交わりを喜び楽しむことができますように。その交わりに加わる方々が起こされるように祈りましょう。

そして、私たちの交わりを通して、神さまがおられることと神さまの恵みのすばらしさを証できたら幸いです。「あなたがたはもはや自分自身のものではありません。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから、自分のからだをもって神の栄光を現しなさい。」とありますように、神さまの栄光をあらわすために人が存在するのであり、教会が存在しています。そのためにイエスさまはご自分のいのちを捨てて、私たちを買い取りご自分の所有としてくださいました。もはや自分のからだ（＝教会）は自分のものではなくイエスさまのものなのです。イエスさまのものでありますから、イエスさまの願うように使っていただければそれが人にとっての一番の幸せであり、教会の存在理由なのです。

神さまの栄光をあらわすことの実際は各人に委ねられています。表れ方は一人一人の賜物や立場や境遇によって違ってきますが、どんな人にも共通している表し方があります。それは、そこに人が存在していること自体です。すべての人は神の作品として存在させられているのですから、それを互いに喜ぶことが神さまの栄光をあらわす一番の方法です。何か特別なことをしなければならぬのではありません。自分とは違うお互いの存在を神さまの作品として見る目を持ちましょう。最高の作品として人を見る目を与えられた

いと願います。その目は人に向けられるだけではありません。私自身もその作品の一人として自分を尊ぶことができるのです。

まとめ

コリント教会にはたくさんの方がいました。その問題は聖なる神の民となるために、乗り越えて行かなければならないものでした。私たちが抱える問題もそうです。イエスさまによって買い取られた者としてふさわしく整えられていくために、様々なところを通過させられます。その道を辛く感じるかもしれませんが、主と兄弟姉妹と共に歩むことで乗り越え、少しずつイエスさまのように造り変えられて行こうではありませんか。私たちが「主と共に」、「主のために」生きる者とされるために、今週も経験するすべてのことが益とされますようにお祈りします。